



## キリシタン神社—日本独自の宗教施設—

ロジェ・ヴァンジラ・ムンシ

10年くらい前に、私はキリシタン神社の歴史と現状について調べたいと思い立ちました。「キリシタン神社」とは通常の神社とは異なり、キリシタンを御神体として祀っている神社のことです。片岡弥吉氏によれば、「キリシタンたる人を祀る神社は、日本に三カ所ある」といいます。その三カ所は、長崎市下黒崎町の枯松神社、長崎市の桑姫神社、伊豆大島のおたいね大明神です。宮崎賢太郎氏は、片岡説に自らの見解を加え、五島列島若松の山神神社と有福の頭子神社もキリシタン神社にあたるとして、合わせて五カ所をキリシタン神社と認めています。しかし、私の調査では、キリシタン神社の総数は八カ所になります。この八カ所のキリシタン神社を自分の目で観察、確認したとき、私は驚きを隠せませんでした。

日本の潜伏キリシタンたちは二百数十年という長期間にわたり、厳しい弾圧と迫害とに耐えて、自分たちの信仰を守り続けてきました。彼らの子孫はキリスト教が解禁された明治以後、もう隠れる必要はなくなったにもかかわらず、あえて「隠れ」というスタンスを選び、昔の潜伏キリシタンの信仰スタイルをそのまま継承することになりました。キリシタン神社を定義すれば、「キリシタンを祀っている神社」ということになり、これはとりもなおさず、「キリシタンに関わりのある神社」という意味です。これは「キリシタン神社」について考える時、最も本質的かつ重要な概念といえます。

ご存知のように、キリスト教の本来の教えによれば、いかに偉大なキリシタンといえども「祭神」には成り得ません。しかし、日本的風習がそこに入り込み、故人となった人徳の優れたキリシタンたちは人々に崇敬され、いつまでも慕われた結果、彼らのお墓が大切に祀られ、それが「キリシタン神社」を生み出したものと思われれます。先祖への尊敬を表すために、当時としてはそれが最も適切な手段であったのでしょう。

さらに、他の重要なこととしては、キリシタン神社について考察する時、一般的にはそれが文化として存在するものと解釈するのですが、神道ともカトリックとも違う要素を含んでいることを見逃すべきではありません。形式面だけを見れば、キリシタン神社の概観はカトリックのイメージとはおよそ結びつかないものであり、むしろ通常の神社に酷似しています。しかし、人々が神社に似せたモニュメントを建立した真意はカモフラージュにあり、通常の「神社」の興りとは似ても似つかないものです。また、キリシタン神社はカトリック教会の聖堂とも全く異なる場所です。カトリック教会の場合、人々は自由に聖堂の中に入って祈ります（典礼行為）。しかし、キリシタン神社の場合、人々は外に立って、神社に向かって礼拝します。

結論として「キリシタン神社」はキリシタンの足跡を残す日本独自の宗教施設であるということです。特に、長崎県に現存するキリシタン神社の重要性は、それらが特定の聖地、精神的拠り所であるだけでなく、地域社会と信仰との融合点なのです。キリシタン神社の祭礼によって宗教的調和が構築されるに至りました。必然的に異宗教間の対話という新たな価値を生み、それは日本人の特性、日常的には神社崇拝などとはほとんど無縁に過ごしているが、何かの折には神社神道のお世話にならないと、なんとなく落ち着きと安らぎが得られないという日本人の精神史のありようを規定していったのではないかと推測します。

(MUNSI, Roger Vanzila : 外国語学部准教授)

## キリシタンの歴史を辿る—復活期の史料『平戸御水帳』の紹介を通して—

石田昌久、加藤富美、関谷治代、山田直子

### はじめに

2013年の米『タイム(TIME)』誌の「パーソン・オブ・ザ・イヤー(今年の人)」に輝いた教皇フランシスコ、その言動に世界中が注目している。

2014年1月15日、サンピエトロ広場で、教皇フランシスコの32回目の一般謁見が行われた。この中で教皇は、1月8日から開始した「秘跡」に関する連続講話の2回目として、再度「洗礼の秘跡」について、日本のキリスト教共同体の歴史を例にとり解説された。教皇は、洗礼の重要性を説明し、弾圧に耐えたキリシタンの歴史を「信徒の模範」と讃えた(以下、カトリック中央協議会のWebページ「教皇フランシスコの2014年1月15日の一般謁見演説」より)。

「神の民にとっての洗礼の重要性に関して、日本のキリスト教共同体の歴史は模範となります。彼らは17世紀の初めに厳しい迫害に耐えました。多くの殉教者が生まれました。聖職者は追放され、何千人もの信者が殺害されました。日本には一人の司祭も残りませんでした。全員が追放されたからです。そのため共同体は、非合法状態へと退き、密かに信仰と祈りを守りました。子どもが生まれると、父または母がその子に洗礼を授けました。特別な場合に、すべての信者が洗礼を受けることができるからです。約250年後、宣教師が日本に戻り、数万人のキリスト信者が公の場に出て、教会は再び栄えることができました。彼らは洗礼の恵みによって生き伸びたのです。神の民は信仰を伝え、自分の子どもたちに洗礼を授けながら、前進します。このことは偉大です。日本のキリスト教共同体は、隠れていたにもかかわらず、強い共同体的精神を保ちました。洗礼が彼らをキリストのうちに一つのからだとしたからです。彼らは孤立し、隠れていましたが、つねに神の民の一員でした。教会の一員でした。わたしたちはこの歴史から多くのことを学ぶことができるのです」。

今年度、南山大学図書館カトリック文庫では、古い洗礼台帳を購入した。史料そのものに書名は付いておらず、その内容から『平戸御水帳』(「御水帳」については後段で詳述)と呼ぶことにする。今回の紹介では、史料そのものの分析と併せて、キリシタンとその歴史、潜伏キリシタンの地である長崎、その中でも平戸、そして史料に登場する当時の宣教師たちについて考察することとした。当時のキリシタンに思いをさせ、この洗礼台帳『平戸御水帳』を紹介していきたい。

### 第1章 日本におけるキリスト教の歴史：特に長崎、平戸を中心にして

平戸市は、長崎県北西部に位置し、平戸(ひらど)島、生月(いきつき)島、度(たく)島、的(あづち)山(あづち)大島等にまたがる区域である。地理的に外国船が寄港しやすいことから、江戸時代には貿易港として栄えた。ポルトガルやオランダ等との南蛮貿易はキリスト教の布教を抜きには語れない。貿易と布教の歴史が凝縮されている地域が平戸である。

#### 1. 室町～安土桃山時代

1549年にフランシスコ・ザビエルが鹿児島に渡来、1550年にポルトガル商船が平戸に入港し、その船長ペレイラの求めでザビエルが平戸を訪れた。第25代藩主松浦隆信(まつら たかのぶ)はザビエルを厚遇し、領内の布教を許可したことから、約1カ月の布教で100余人に洗礼を授けた。しかし、ザビエルは日本の中心地への布教を考えていたので、コスメ・デ・トルレスを平戸に残し、周防(現在の山口県)から京都へ向かう。周防に滞在した1551年、ザビエルは、大名であった大内義隆から、宿舎を兼ねた説教所として、廢寺になっていた大道寺を与えられた。これが日本最初の教会と言われる。

平戸ではトルレス、バルダザール・ダ・カーゴ、フェルナンデス、ルイス・アルメイダ、ガスパル・ピレラ等の宣教師が布教を続けた。カーゴ神父が、松浦家の一族である籠手田安経(こてだ やすつね)に洗礼を授けたことから、生月、度島、根獅子(ねしこ)の領民の多くがキリスト教に改宗した。

ポルトガルは宣教師の布教を前提に貿易を行うとしていたが、仏教徒との対立、領主の勸商禁教策、日本とポルトガル商人同士の暴動事件(宮の前事件:1561年)の発生等で、状況は悪化していた。領主隆信自身は改宗しなかったが、ポルトガルと貿易の継続を望んでいたため、1564年勝尾岳東麓に東洋風天主堂「天門寺」を建て宣教師たちを常駐させた。しかし、これは功を奏せず、結果的にポルトガル船は、貿易で対立していた大村藩へ移動した。

第26代藩主松浦鎮信(まつら しげのぶ)の子久信は、初のキリシタン大名大村純忠の五女松東院(しょうとういん)メンシアを妻に迎えた。これは政略結婚であり、メンシアは、南蛮貿易を巡って対立していた松浦藩と大村藩の和睦の要として利用されたのであった。しかし、夫の久信の死後、父鎮信が返り咲き、キリシタン弾圧を強行、引き続き鎮信の死後は、洗礼を受けていないメンシアの二男信清が、キリシタン弾圧を続行した。メンシアは、隆信(祖父)と鎮信(父)から何度追られても棄教しなかった強い信仰心の持ち主だったため、幕府に呼び出され、江戸下谷の広徳寺に隠棲させられることになった。

1587年に秀吉の禁教令が出され、1612年家康の禁教令、1616年秀忠の禁教令と続く中、藩主鎮信が度島のキリシタンを全て処刑、1599年に籠手田一族を生月から追放した。その結果、1600年には平戸にキリシタンは表面上いなくなり、この後は潜伏して信仰を続けることになる。

潜伏キリシタンは、自宅に神棚、仏壇等を置きながら、人目につかない納戸にキリストやマリア等(納戸神)を祀って密かにキリスト教を信仰していた。禁教令が解けた明治以降も一部の信者はこの形の信仰を続けていた。

## 2. 江戸時代

1609年、後に家康に仕えるウィリアム・アダムズ(三浦按針)が平戸に来て以来、オランダ商館やイギリス商館が設置された。その一方で、生月のキリシタンに対する処罰などの弾圧は続いていた。1622年に、ジョアン坂本左衛門、ダミアン出口、ジョアン次郎右衛門が、平戸本島と生月島の中の無人島中江之島で殉教、カミロ・コンスタンツ神父は田平で火刑になった。

1640年に幕府は「宗門改役」を置き、信仰の調査によるキリシタンの摘発を行った。これを全ての藩に広めることとし、1645年には松浦藩にも置かれた。非常に古い資料であるが、『平戸学術調査報告』の中の「平戸切支丹関係文献資料」に「元禄二巳年肥前平戸領古切支丹之類族存命帳 松浦壱岐守」の記載が写しており、名前と処罰内容が書かれている。「切支丹本人 新兵衛 斬罪」「次郎右衛門妻 切支丹本人 沈殺」等である。また、収容する牢屋の不足から、大村(大村郡崩れ:1657年)や長崎で捕えられたキリシタンが平戸へ送られ、そのほとんどが斬罪された。囚人の出身地、名前、性別、年齢、処罰の方法が記録されている「大村より参候囚人覚」「平戸へ参候者之覚」「大村牢内御預古切支丹存命並死亡帳」等の資料によれば、両親は20代から30代、子供は1歳から10代が多く、高齢者には60代の者もいた。10歳に満たない子供が多数処罰されており、その悲惨さが伝わってくる。また、踏み絵による取り調べは、踏み絵そのものが失われたことで途絶えていたが、新たに長崎から取り寄せて、再度実施された。こうしてキリシタンへの弾圧は強まり、1644年、最後まで国内に生き残っていた、ただ一人のイエズス会宣教師小西マンショも大阪で殉教した。これ以来、1859年にパリ外国宣教会のジラル神父が再来日するまで、日本には宣教師は不在となる。

## 3. 江戸後期～明治時代

1858年、日本は西洋諸国の求めに応じて門戸を開くようになった。翌1859年パリ外国宣教会のジラル神父が開国後初めて横浜に上陸し、1863年同じくパリ外国宣教会のフェーレ神父、プティジャン神父が長崎に入る。フェーレ神父の設計で始められた大浦天主堂の建設をプティジャン神父が引き継ぎ、天主堂を完成させ初代主任司祭となった。1865年3月17日、大浦天主堂を訪ねた約15名の浦上の潜伏キリシタンをプティジャン神父が発見。この劇的な出会いが「信徒発見」と呼ばれている。翌年プティジャン神父は再宣教後初の日本司教となり、これを機に長崎を中心に潜伏キリシタンが次々と発見されて、神父と密に連絡をとりあうこととなった。

しかし、1868年に明治政府となっても禁教令は継続された。新政府が国民への方針を示した「五榜の掲示」(高札)の第三札に「切支丹・邪宗門厳禁」がある。その後1873年になり、ようやく明治政府が制度としての禁教令を廃止し、1889年の大日本国憲法第28条「信教上の自由権」および1899年の「神仏道以外の宣教宣布並堂宇会堂に関する規定」でやっとキリスト教が公認された。

今回入手した洗礼台帳『平戸御水帳』の、著名な神父の名前と共に書かれている受洗者の名前を見ると、禁教の暗く長い歴史を経てやっと光を見ることができた人々の喜びが伝わってくるようで感慨深い。

## 第2章 いわゆる「キリシタン」とは

### 1. 「キリシタン」の呼称・表記について

キリシタン(ポルトガル語:christão)は、日本の戦国時代から江戸、さらには明治の初めごろまで使われていた言葉(口語)である。そして、厳しい禁教下にもかかわらずキリシタンの信仰活動を維持した人たちの呼称は、一般に流布している「隠れキリシタン」のほか論者によっていくつかある。ただし、彼ら自身はみずからをそうは呼ばない。これは外部の研究者から与えられた名前にすぎず、当事者のなかには不快感すら示す人もいるという。キリシタンのことは外部には隠してきたため、第三者が聞いてすぐにそれとわかるような呼び方はしなかった。自称を用いることができれば問題はないのであるが、地区によってそれぞれ異なっているため、包括的な外部からの呼称が必要となってくる。

大橋幸泰氏は、「キリシタン」と一口にいても、その呼称は固定していたのではなく、それを使用する人びとのその対象に対する評価や意識を反映していると考えられると言う(『潜伏キリシタン』p.17)。隠れるように活動していたことは事実なので、江戸時代のキリシタンを“隠れキリシタン”と呼ぶことが直ちに誤りだとはいえないが、明治時代以降、禁教が解除されたにもかかわらず、隠れるように活動していた近現代のキリシタン継承者との差異を意識するため、江戸時代のキリシタンを「潜伏キリシタン」と呼ぶことにしたいと述べている(『同書』p.15)。

宮崎賢太郎氏も、キリシタン禁教令が出されていた江戸時代の信徒を「潜伏キリシタン」、1873年禁教令が撤廃された後も潜伏時代の信仰形態を続けている人々を「カクレキリシタン」と呼んで区別している(『カクレキリシタンの実像』p.40)。「現在、内部者にも外部者にも一般的に用いられているのが『カクレ(隠れ)キリシタン』という名称です。この名称は外部者が勝手につけたもので、決して最適な名前とはいえませんが、今となっては一定の市民権を得ており、他によりふさわしい呼び方も見当たらない現状では、この呼称を用いるのも致し方ありません」(『同書』p.43)。また、表記については「ポルトガル語のキリシタン(christão)に漢字を当てた『切支丹』は江戸時代において用いられた歴史的当て字であり、明治以降のカクレキリシタンには不適切です。漢字の『隠れ』は表意文字であり、今でも隠れているという誤った印象を与え続けかねません。欧語の『キリシタン』は片仮名で、『かくれ』は平仮名書きして、『かくれキリシタン』と平仮名と片仮名をつなげて一語を作るのもまた不自然です。現在、隠れていなければキリスト教徒とも見なすことのできない彼らの信仰のあり方に即して表記するならば、表意文字でない音のみを示す片仮名の『カクレキリシタン』という表記法が最善といえるでしょう」と述べている(『同書』p.44)。

### 2. 「キリシタン」の見方について

呼称に加え、キリシタンをキリスト教徒とみなすかどうかについても議論の分かれるところである。宗教はある意味では普遍ではない。仏教であれ、キリスト教であれ日本に伝来された時から、時代とともに変化し融合してきた。キリスト教も衝突しつつ

日本の風土・文化に融合し、仏教や神道など他の宗教とも融合した。

イタリア国立パピア大学アニバレ・ザンバルビエリ教授(Prof. Annibale Zambarbieri)は、次のように述べている。「今の『キリシタン』をキリスト教徒とみなすか否かについては議論が分かれる。仏教や神道の影響を受けているとされるためだ。だが、私は彼らを『古いキリスト教徒』と呼ぶべきだと考える。地域の文化と混じり合うことはしばしば起きる。法王でさえ、彼らを信徒の模範として語った。彼らをキリスト教徒とみなさない理由はない」(『朝日新聞』2014.3.26)。

他方で、カクレキリシタンはキリスト教とは異なるひとつの土着の民族宗教であると明確に認識しなければならないという議論もある。前出の宮崎氏は、その理由を次のように述べる。「カクレキリシタンにとって大切なのは、先祖が伝えてきたものを、たとえ意味は理解できなくなっても、それを絶やすことなく継承していくことなのです。それがキリスト教の神に対してというのではなく、先祖に対する子孫としての最大の務めと考えていることから、カクレはキリスト教徒ではなく祖先崇拜教徒と呼んだほうが実態にふさわしいのです」(『前掲書』p.11)。

かれらは、キリスト教徒という意識がないため、明治以後宣教師が村社会のなかに入り教会が建設されるようになっても必ずしも「カトリック」に改宗するわけではなかった。むしろそうでない場合が多かった。大橋氏は、宗教形態としてはおもに、次の三つのパターンに分かれていったという。すなわち、その宣教師の指導のもとに入って教会帰属のキリスト教徒になる場合と、それに違和感を覚えてあくまで先祖伝来のキリシタン信仰を継続しようとする場合と、地域の神仏信仰のほうに身を寄せる場合である。また、宮崎氏は、カクレキリシタンをやめた後、仏教徒となる人が約8割、神道が約2割弱程度で、新宗教という人もいくらかいるが、カトリックは1%もいないだろうと分析する。

### 第3章 史料紹介：『平戸御水帳』について

#### 1. 史料『平戸御水帳』について

『平戸御水帳』は、市販されたものではなく、冒頭でも述べたとおり標題がある訳でもないで、あくまでも版心(柱)の記載事項から借用した仮題である。「御水帳」とは、いわば洗礼台帳であり、キリシタンの潜伏時代以来の洗礼を御水と言ったことに由来する。本史料は、平戸島における、1878(明治11)年7月28日から1884(明治17)年9月7日までのほぼ6年間、約70名の授洗記録である。

形態としては、縦39.4cm×横14.6cm、和紙の袋綴じ、四つ目綴じ(四針目。綴じ側に四つ孔が穿いたもの)、全182丁の和装本である。長崎出身であり、日本における近代活版印刷の祖とも言われる、本木昌造が鑄造した金属活字(2号活字)による印刷と思われる。ただし、柱の「平戸」の文字だけは木活字であり、各教会で使用できるよう配慮されたものであろう。それゆえ、長崎近辺の古い教会には同様の御水帳が眠っている可能性は容易に想像できる。表紙あととの遊び紙には「式百板(枚)ひらど」と読める鉛筆による走り書きがあり、木活字部分を「平戸」としたものを200枚印刷したことの証左ともなっている。そして11行の罫があり、必要事項を記入する様式となっているが(37丁目まで記入)、「御出世以来一千八百七十八年△月△日」(△はスペース、以下同じ)と印字されていること、この手の活版印刷は1877年以降のものしか知られていないことから、自ずと1877～1878年に印刷されたものであると推測できる。

背には「タザキ△シン」、その下に「ヒボサシ△シン」(消線あり)と墨書きされている。「タザキ(タサキ)」は田崎、「ヒボサシ」は紐差(現地では「ヒモサシ」より「ヒボサシ」に近い発音をするらしい)と考えて間違いなからう。1878年にペルー神父が来島して田崎に仮聖堂を建て、1885年にラゲ神父が近くの紐差に移転させて布教の中心に据えた事実と符合する(詳細は次章)。しかし「シン」については明らかではない。単に信者の意味の頭文字「信(シン)」なのか、それとも1873年の禁教令撤廃以降も潜伏時代の信仰形態を維持し続けた「旧(ふる)キリシタン(カクレキリシタン)」に対して、カトリックに復帰した「新(シン)(復活キリシタン)」なのか(生月島ではカトリックのことを「新方」(しんかた)と表現することもあるという)、あるいは2冊目という意味の「新(シン)」なのか、はたまた別の意味があるのか、定かではない。

#### 2. 本史料の印刷・記入事項について

続いて、印刷・記入されている事柄について詳しく見ていきたい。なお、旧字体表記は新字体に改めた。まず1丁目1行目には、前述の「御出世以来一千八百七十八年△月△日」とあり、その下の欄には「死去」とあって、亡くなった場合の日付等が書き込めるスペースが設けられている。本来はこの上欄に記入日を、後述の授洗日記入欄にその日付を、それぞれ記載する様式だと思われるが、実際には前者はほとんど空欄で、後者の日付が代用されている。次の2行目から4行目にかけては上下2枠に分けられ、上段には右から「実父の名△歳△所△」「実の婚姻の人」「実母の名△歳△所△」とあり、10行目に記入する「児」の実の両親名を記載する様式となっている。さらに、「実の婚姻の人」の下には線が引かれて「此の両人の」とあって、下段4行の「実父の名△所△」「実母の名△所△」「実父の名△所△」「実母の名△所△」につながっており、「児」の父方・母方双方の祖父母の名および所在を書き入れるようになっている。そのあと6行目には「子に御水又仕方を授けた神父の名△一千八百△年△月△日」、7行目には「子に御水を授けた水方の名△所△」、その下欄に「はつこむによ△」、8行目には「抱親の名△所△」(記入欄として印刷されている訳ではないが、「所」を記入した下に、「年〇〇」と年齢を記載している例がいくつも見られる)、その下欄に「こんひるまさん△」とある。9行目には「帳方の名△所△」、その下欄に「つまの名△帳面の号△番」とあり、10行目には「児の名△」、その下欄に「子の生所△」、「誕生△月△日」と続いている。つまり、「児(子)」の両親はもとより、祖父母、結婚した場合の「つま」(配偶者)、「つま」が記載されている丁箇所まで判別できる仕組みになっており、少なくとも三代以上にわたる系譜を知ることができる。このことは、比較的現存数が多い宗門人別改帳では辿り得ず、それだけでも本史料の重要性が垣間見える。そのあと11行目には、「番△」という記載順番号記入欄があり、その下に「御水帳△」(このスペースには「児の名」が見出しのごとく再度記載されている)、「平戸」と印刷されている。また、袋綴じであるから

裏面は全くの左右反対となっている。

印刷面には聞き慣れないことがいくつか見受けられるが、名称は地方により様々であるもの、おおむね次のように考えられている。すなわち、「帳方」とは、神をお守りし、行事を執行する役であり、「(御)水方」とは、洗礼を受ける役である。「抱(き)親」は「聞役」などとも言い、行事の補佐・連絡・会計係とされている。出生の際の役割としては、「抱親」がその子を預かり、「水方」を訪ね洗礼を受けて「霊名(靈魂の名)」をいただき、「帳方」がこれらを司る、という流れである。「帳方」の「帳」とは狭義には「日繰帳(ひぐりちょう)」と呼ばれる教会暦を指す。そして、この教会暦に基づき行われ、神への公式礼拝である典礼は、神と人間とが出会い、相対する場としてのどの宗教にも存在するが、それゆえ各宗教の本質が現れる。カトリック教会でも共同的な各種典礼を必須のものとしている。しかし、典礼の本来の担い手である聖職者は潜伏期には不在であったため、どうしてもその代役が必要となる。それこそが「帳方」であり「水方」である。本史料は復活時の台帳であるから、ほとんどの「神父」欄に記入があって「水方」には無い。なお、生月・平戸地方には「お帳」が無く、「土用中寄り(どよなかより)」という大集会を毎年開いて役職を決定するようであったが、典礼に重きが置かれていることに変わりはない。また「はつこむによ」は「初聖体拝領」のことであり、「こんひるまさん」は「堅信」のことである。

総じて、カトリックへの復帰を促すためであろうか、潜伏時代のキリシタンのことばを尊重してそのまま用いているところに、カトリック教会側からの寄り添う思いが感じられる。

### 3. 他の「御水帳」との比較について

現存が確認されている御水帳を示せば、①馬渡島(まだらしま)(佐賀県北部玄界灘)②伊王島(長崎市長崎港外)[長崎県立図書館所蔵]③長崎市蔭ノ尾(かげのお)④五島青方郷大曾(あおかたごうおおそ)[立教大学海老沢有道文庫所蔵]⑤長崎市大平⑥褥(しとね)(北松浦地方)⑦瀬戸脇(五島)⑧生月島(平戸島の北西)、のものとなる。本学が入手した史料は、少なくとも②④⑧とは印刷様式が異なり、①⑦と似ている。実際、木活字部分(本学史料の「平戸」部分)以外は同じ印刷面のように見受けられ、「平戸」の代わりに①は「馬渡島」、⑦は「五島」と印字されている。さらに④は、「五島青方村天主堂御水帳」としてWebページ上にて全文のPDFファイルが公開されているので、ある程度の比較は可能である。縦35.3cm×横15.2cm、1873年までに刊行されたプティジャン神父ゆかりのプティジャン版と同じ唐紙を用いた和装、石版刷りで、本学の『平戸御水帳』よりも古版である。1872～1876年頃に印刷されたとき、1877年9月10日から15日というわずか1週間ほどの間に292名分が記録(100名分を一綴として300名分を1冊に合綴)されている。そして両者の圧倒的な情報量の違いと記録された期間の大きな違いに驚かされる。『平戸御水帳』の受洗者は、1815年生(68歳)の女性と思しき記載もあるが、ほとんどは新生児もしくは幼少の者であるのに比べて、五島のそれは幼児と成人がほぼ同数である。平戸のものは基本的に出生のたびに記入されたものであり、本史料とは別に成人の授洗記録が存在するのかもしれない。五島の方は、過去10余年の受洗者を幼児、成人を問わず短期間に記録したものである。さらに細かく見ていくと、例えば『五島青方村天主堂御水帳』には「靈魂の名」(霊名)と「肉身の名」(俗名)とが明確に区別されているが、『平戸御水帳』はそうではない。また後者に「はつこむによ」「こんひるまさん」というキリシタンの伝統語が見られるのに対して、古版の前者には無い。一時期、カトリックへの復帰をやや強引に進めたとされる点の反省を踏まえた結果であろうか。その一方で、後者にのみ「子に御水又仕方を授けた神父の名」の欄が見えるのは、配慮すべきところは配慮し、押さえるべきところは押さえるという工夫とも受け取れる。

一般的に五島・外海(そとめ)・長崎系と生月・平戸系の2系統に分類されるキリシタンのうち、⑧以外は五島・外海・長崎系であることに鑑みると、数少ない生月・平戸系の史料がひとつ増えたことは大きな意義があると思われる。生月・平戸系とひとくりにされるが、生月と平戸とでは大きく異なる点があるので——かつて平戸の御水帳が東京の古書市場に現われたが、一葉ずつのバラであった——、その意味でも、唯一まとまったかたちの平戸のものとして、本学の『平戸御水帳』は貴重である。

### 4. 今後に期待される研究について

平戸島は土着の信徒もあれば移住者もあったが、その後カトリックに改宗したグループと根獅子のようにカクレキリシタンとして潜伏時代の信仰形態を維持し続けたグループとに分けられる。どちらかと言えば、生月島側(西側)はカクレキリシタンとなった人々が多く、田崎、紐差など(東側)はカトリックへ復帰した割合が多かったようである。これに関連して、カクレキリシタンの、平戸島と上五島(五島列島北東部)とのつながりについて、以前は知られていなかったが近年確認されることとなった。この事実追認と考証において本史料が役立つ可能性もある。

『平戸御水帳』は、記載人数は少ないものの、受洗者本人のみならず「帳方」「水方」「抱親」などの名前を丹念に見て比較すれば、復活時代のカトリック教会の勢力を把握する一助となるだけでなく、人物の確認、さらには受洗年齢や家族関係から婚姻関係や信徒の移動まで、多岐にわたる当時の状況を詳細に知ることができる。他の御水帳と突合わせて調査することで、より詳しい実態が掴めることは言うまでもない。また、明治初期の庶民生活に関する基礎史料としてだけでなく、カトリック教史、民俗学あるいは宗教社会学等々、広範囲な研究にとって有益な史料となり得るであろう。

## 第4章 『平戸御水帳』に登場する神父たち

『平戸御水帳』(以下、『御水帳』と記す)に名前が記されているのは、ペルー神父、ソーレ神父、ラゲ神父、ボンヌ神父、フェリエ神父、マタラ神父の6人の神父たち。いずれもパリ外国宣教会の神父である。パリ外国宣教会は、17世紀中頃、海外宣教地で教会を設立し、現地人司祭を育成することを目的に設立されたフランスのカトリック宣教会である。同会は1844年に那覇に上陸したフォルカード神父を先駆けに日本のカトリック宣教にむけて活動を開始し、1859年フランスの外交使節団の通訳として江戸に入った。かつてのイエズス会の活動にはポルトガル国家の支援があったように、パリ外国宣教会の後継として

は、日本との通商を望むフランス政府やフランス軍の姿が見え隠れしていた。明治時代は、日本におけるパリ外国宣教会の活動が本格的に展開し始めた黄金時代であり、1870年代から1900年代初頭にかけて、同会から150名もの若い宣教師が来日し、日本のカトリック教会の礎を築いたとされている。

### 1. ペルー神父 (PELU, Albert-Charles)

6人の神父の中で、最初に来日したのは、ペルー神父で、1872年24歳の時である。1870年に司祭に叙階され、翌年パリ外国宣教会に入会するとすぐに来日し、最初は新潟で宣教活動を始める。1873年にキリシタン禁制の高札が撤去され、浦上のキリシタンが釈放され帰還すると、プティジャン神父から海外・黒島・平戸島、馬渡島の広大な教区の運営を任せられ、1878年に平戸の田崎に教会堂と司祭館を建てた。『御水帳』の日付は1878年7月28日より始まっている。洗礼を受けた神父の名前の欄に「アルベルツァ ペルサマ」と記されており、まさにこの頃のことである。Webページに掲載されている堂崎天主堂100周年(2008年)のオリビエ・シュガレ師記念講演『下五島で活躍した宣教師』の中では、ペルー神父は次のように語られている。「文字通り動く宣教師で、いつもじっとしておられない、いつもあちこち走り回って動いていた。彼は本当に頑健な体の持ち主で非常に優れた組織力の持ち主であり、勇敢な船乗りでもあった。彼は海の巡回宣教を日本の歴史の中で初めて行った。巡回の宣教、いつも船に乗って島から島へ、ずっと回っていたわけです。1892年、彼は五島列島全体の責任を任せられて教会の組織化と運営の合理化に力を入れた。せっかちで、彼が何か決めたら皆動かないといけない。強引に人を指導するため文句を言う人もいたようです。しかし教会の立て直しは緊急課題であったためあの頃にはこのような強引さが必要だったかもしれません。ペルー神父は教会をたくさん建て、1908年堂崎の教会を完成させた。彼はこの教会を非常に自慢しており、世界一番の教会だと思っていたそうです」。1900年代に入ると、五島に次々と教会を設計・指導した。長崎県を中心に多くに教会建築を手がけた棟梁である鉄川与助の若き日に、アーチ断面を水平に押し出した天井様式を特徴とするリブ・ヴォールト工法と幾何学を指導した人物としても知られている。

▶ 1848年フランスのサルト・フレネーシュルサルトに生まれる／1870年(22歳)司祭に叙階／1871年(23歳)パリ外国宣教会に入会／1872年(24歳)来日／1918年(70歳)逝去、長崎浦上宣教師墓地に眠る

### 2. ソーレ神父 (SAURET, Michel)

ソーレ神父は、生涯にわたって、福岡県の筑後今村と久留米を中心に宣教活動を行った。来日後はプティジャン神父より日本語を学び、しばらくの間他の神父と共に平戸に行き、平戸からさらに近隣の島にも巡回していたようである。『御水帳』に記載された日付は1880年6月16日および17日の2日間のみ。今村に赴任する直前のことだろうか。『御水帳』には、「みきるそーれ」「ソーレサマ」と記されている。ソーレ神父が平戸から移った今村の地は、長い迫害をくぐり抜け明治までキリシタン信仰を守り続けてきた歴史的にも興味深い土地柄であったようだ。「当時の神父は二代目ソーレ神父だが、初代コール神父と同じく、まるで開拓民のような暮らした。宿舎もなく、貧しい農民の家にとともに住み、田畑を耕し、農民食を食べ、今村人になりきっての伝道であった。特にソーレ神父は九年近くもこのような今村で暮らしている。今村の人たちが次々と洗礼を受け、後を絶たなかったというのも、このような神父と村人たちの血の通った深い結びつきがあつたのころと思われる」(『カトリック愛苦会修道会の歴史的研究I草創期』)。このような活動の中で、今村の村民を集団洗礼に導き、1881年には聖堂を完成させる。その後、久留米に移ったソーレ神父は、復活キリシタンの再教育に力を注ぐ一方で、医療の心得をいかし、「斯道院」と名付けた診療所を開設し、ごく僅かな治療費で貧しい信者の治療にあつていたらしい。また故国フランスから西洋草花の種子を取り寄せ、地元の園芸家に分け与えたり、トマトや白菜の種を分け与えて栽培法を伝授したりと、久留米特産の基にも貢献したようだ。さらにはソーレ神父が著し、日本語に訳された『万物之本原』(1889年)、『人類之本原 上・下』(1892年)は、その久留米の地で出版され、今なお国立国会図書館に所蔵されている。『万物之本原』は第一節「地球ノ始メハ流動体ナリ事」で始まり、第十六節「生類自生論ノ事」で終わっている。ソーレ神父は様々な方面に通じる多彩な人物であったようだ。

▶ 1850年フランスのオーヴェルニュ・サンジェルヴェに生まれる／1876年(26歳)司祭に叙階、来日／1878年(28歳)パリ外国宣教会に入会／1917年(67歳)逝去、久留米カトリック墓地に眠る

### 3. ラゲ神父 (RAGUET, Emile)

6人の神父の中で、ラゲ神父はただひとり、ベルギー出身である。新約聖書のラゲ訳と仏和辞典の著者として、後世に名前が知られている神父である。第七高等学校造士館の教授ら日本人同志との協力でもできた聖書は、その翻訳の確実さと優れた文体と文脈により、今もなお、高く評価されている。ラゲ神父は1882年頃ペルー神父の後任として黒島、平戸、馬渡の責任者となった。ペルー神父が田崎に建てた教会堂を、1885年に交通の便のよい紐差に移転し、現在に続く紐差教会を発足させた。『御水帳』には1883年の日付で「ダゲサマ」「だげさま」「ラゲサマ」などと記されている。1889年に大日本帝国憲法が公布され、信教の自由が明文化されると福岡、大分、宮崎、鹿児島などに根拠地をつくり、九州に組織的な布教を進めた。『カトリック大辞典』によると「来朝して以来ラゲは毎日を仏和辞典編纂準備に没頭した。しばしば未信者に講演をしたので、正確な或る程度美しい日本語を話せるやうになった。当時の名演説家の言廻しや調子を数多く暗誦するやうに努め、それらに必要な機会に用ふることを心得ている」とある。堪能な日本語をいかして、講演会を開き、場所を借りて人を集め、教えを説き、福岡での3年の間に36名に洗礼を授けたという。宮崎を経て、鹿児島に移ると、「四十歳をこえたラゲ神父は、布教と司牧、建築と翻訳、修道女の指導、まさに八面六臂のはたらき、外的激務のうちに、内的生活をきらめかした時期である」(『ラゲ神父の面影』p.464)とあり、さらに多忙な日々を送る。1915年には前任者の神父から引き継いだキリシタンの聖地、浦上の地に天主堂を完成させて66歳で引退。人生の最期は、自ら養い育てた修道女たちの手厚い看護の末、永遠の眠りについた。

▶ 1854年ベルギーのブレス・ル・コントに生まれる／1877年(23歳)パリ外国宣教会に入会／1879年(25歳)司祭に叙階、来日／1929年(75歳)逝去、東京府中カトリック墓地に眠る

#### 4. ボンヌ神父 (BONNE, Francois)

コール神父の後任としてソーレ神父が今村で布教を始めたのと同じ頃、ボンヌ神父は、同じコール神父の後任として天草で布教活動を始めている。ボンヌ神父は布教活動中に激しい肋膜炎にかかり、これは全快せずに生涯にわたって神父の健康に影響を及ぼしたとされている。そのためか、天草での布教について記された資料はほとんど見られない。『御水帳』には、1880年10月28日の日付で名前が記録されているだけである。天草を中心に布教しているなかで、周辺の地域にも足を運んでいたのだろうか。『福岡教区50年の歩み』には、1880年10月7日に、ボンヌ神父が馬渡島で洗礼を受けた記録が残されている。1882年にプティジャン神父によって新設された長崎神学校の校長に若くして任命された後、29年間の長きにわたって校長の職にあり、浦川和二郎(後の仙台司教)、脇田浅五郎(後の横浜司教)、松岡孫四郎(後の名古屋司教)など、後の日本のカトリック教会を支える日本人神父たちを育て上げた。「復活して間もない日本教会に、期待され、また有為な働き手として歓迎された邦人神父たちのほとんどは、ボンヌ校長の薫陶を大なり小なり受けた人たちであり、その人格と識見の素晴しさは、皆が均しく認め、尊敬していたところである。また、堂々たる体躯の持主であったが、それに相応して度量も広く、新神父たちからは、クザン司教以上に、おそれられていた」(『福音伝道者の苗床』p.51)とある。ちなみに、松岡孫四郎司教は第2代南山学園理事長(理事長職:1942-1948)であり、1964年5月の山里キャンパス(現名古屋キャンパス)の創設時には、カトリック名古屋教区の司教として祝別式、落成式を執り行った人物である。ボンヌ神父は1910年に第3代東京大司教に任命されたが、1911年に以前からの病気が再発し、それから1年もたたずに亡くなっている。

▶ 1855年フランスのサヴォワ・サン=クリストフに生まれる / 1879年(24歳)司祭に叙階 / 1880年(25歳)来日 / 1912年(57歳)逝去、青山霊園外人墓地に眠る

#### 5. フェリエ神父 (FERRIE, Joseph-Bernard)

フェリエ神父は最初のペルー神父から遅れること9年、1881年1月15日に来日した。『御水帳』には、来日直後の1881年10月29日の日付で、「ジョゼフ・ベルナルド・ヘレイエ」と一度だけ名前が記されている。来日後は天草に赴任し、困苦欠乏の中で、多数に洗礼を授けたとされている。鹿児島に赴く途中に、皿山(鹿児島県)で島原の乱の落人集落の約90名に洗礼を授け教会を建設、薩摩宣教の基礎を築いた。1891年、「フェリエ神父は、鹿児島で洗礼を受けたと云う一人の貧しい大工から大島の住民がカトリック教を知ろうと望んでいる事を告げられ大島行きを頼まれ」、「鹿児島より、木曾川丸でカトリック宣教師として初めて奄美の福音宣教のため来島、…10日間滞在して福音を述べるフェリエ神父の講演に名瀬の殆どの住民が参集し多大の影響を与える」(『カトリック奄美100年』p.53)と始まる奄美大島における宣教により、1916年には信者数は全島で3,000名に達し、フェリエ神父の名は「奄美大島の使途」として知られることになる。また、奄美大島の昆虫や植物を採集し、この地域の昆虫相の解明にも貢献。フェリエ神父の名に由来する「フェリエベニボシカミキリ」という美しい虫が、奄美市指定希少野生動物に指定されている。

▶ 1856年フランスのアビロン・ガラゼに生まれる / 1877年(21歳)パリ外国宣教会に入会 / 1880年(24歳)司祭に叙階 / 1881年(25歳)来日 / 1919年(63歳)逝去、熊本天主教墓地に眠る

#### 6. マタラ神父 (MATRAT, Jean-Francois)

マタラ神父は、フェリエ神父と同年。ほぼ同時期に来日し、黒島・平戸地区で布教にあたり、平戸を代表する教会の数々を建てた。「八丁櫓をしたた6尋ばかりの舟に屋根を張った御用船とよばれる舟で、神父様は巡回してまわられた。移住者たちにとって、ラゲ神父様、マタラ神父様は頼れる唯一の指導者であり、一ヶ月に3、4回入港する御用船をたのしみに待ったという」(『上神崎100年史』p.44)とある。『御水帳』には1882年から1884年にかけて「マタラサマ」「まてるさま」などの名前が、ラゲ神父の名前と交互にみられる。ラゲ神父の助任司祭として活動していた頃だろうか。ペルー神父が田崎に建て、ラゲ神父が紐差に移した聖堂は、各所から多数の信徒が訪れ、すぐに手狭となり、1887年にマタラ神父が木造の教会堂を建てる。生涯にわたって平戸に留まり、地元の人とともに布教を行い、死に際しては、愛する田崎の地に埋葬されることを望んだと言われている。マタラ神父の葬儀は、若い時に彼を指導したラゲ神父が執り行った。紐差教会には参列者が入りきらず、木ヶ津湾を見渡す丘の中腹にある墓地まで1,200人が追従し、信者たちが教会から1時間かけて歩いたと伝えられている。その墓碑の傍らには「日本での40年の宣教は偉大であった / 88年たっても慕われ続けている / 心から感謝しています / マタラ神父様に、そしてフランスに。 / 紐差教会歴代の主任司祭」と刻まれている。

▶ 1856年フランスのロワール・ファルネイに生まれる / 1878年(22歳)パリ外国宣教会に入会 / 1881年(25歳)司祭に叙階、来日 / 1921年(65歳)逝去、田崎の墓地に眠る

#### 7. 神父たちの生涯を振り返って

『日本の教会の宣教の光と影』には、当時来日したパリ外国宣教会の神父たちについて、次のように記されている。「司祭になり、旅立ちの時が来ると、仲間と親戚に囲まれて、殉教を賞賛するようなロマンチックな出立式の歌を歌い、祖国に帰らないつもりで、親や兄弟と別れを告げ、長い船旅に出ます。一番遠い国、日本なら、二、三ヶ月後に上陸し、一、二年間、先輩の指導の下に日本語を学ぶ(まだ当時は日本語学校がありませんでした)と同時に、宣教の心構えを身につけます。その後、日本人の伝道師とペアーを組んで、任命された地で巡回宣教を始めます。家庭訪問をしたり、カトリック要理を教え、求道者に暗記させます。宣教師として養成するのにふさわしい子がいれば、小神学校を紹介します。その他、土地を買い取って聖堂を建て、場合によっては福祉施設(特に孤児院)を創設し、あるいは死んで行く人(特に老人と子供)に洗礼を授けることによって、天国に送り出します。宣教師たちは比較的短い一生を全うし、憧れの天国にすべての望みを託して死んでいきます。こうして、おわかりのとおり、明治時代に来た宣教師たちは、例外的に貴族出身の人もいましたが、ほとんどは農村出身で、エリートを対象に知的な活動をするよりも、家庭を中心とした司牧宣教に力を入れていましたし、大きな髭をもって、強い印象を

与えていたでしょう。しかも目の奥にやさしさが感じられ、身近で、大変慕われていたような気がします」。

6人の神父たちの写真を見てみると、皆、司祭服に包まれ、立派な髭がたくわえられた顔は深い信仰に支えられてやさしく微笑み、同じような雰囲気を感じ出している。しかしながら、それぞれの人生は故郷を遠く離れて一人ひとり歩む道であり、陰しく厳しいものだったろうと想像するに難くない。このたび本学図書館の所蔵資料となった『御水帳』に記された名前から、その道のりの一端を知ることができたことは私たちにとっても大きな喜びである。

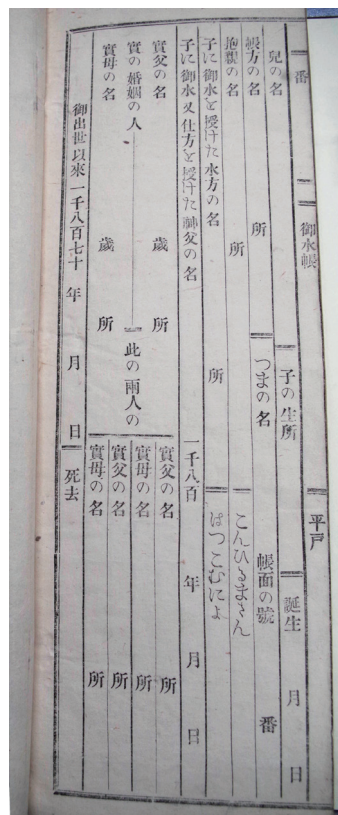
おわりに

1865年3月17日大浦天主堂に於ける「信徒発見」から来年(2015年)で150周年となる。今、日本のキリシタンが改めて脚光を浴びている。バチカン図書館で発見されたキリシタン関連資料(約1万点)が国際研究プロジェクトのもとで整理、デジタル化、公開されれば、各分野での研究が一層進むであろう。バチカン図書館と日本の研究機関との交流も深まる。また、今年「世界文化遺産」登録候補として推薦された「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が2016年に登録されれば、「人類共通の貴重な財産」として保護すべきものと世界的に認定され、国内外での認知度もさらに高くなるであろう。研究者やキリスト教関係者のみならず一般の人々の関心も高まり、現地を訪れる人々も増えことが予想される。南山大学図書館カトリック文庫もこれらの研究や文化交流に貢献できれば幸いである。

【参考文献】

- ・カトリック中央協議会「教皇フランシスコの2014年1月15日の一般謁見演説」  
<http://www.cbcj.catholic.jp/jpn/feature/francis/msg0081.htm> [accessed 2014.10.1]
- ・岡部 隼介編『史都平戸：年表と史談』(9版) (松浦史料博物館, 2010)
- ・『平戸カトリック年表』(平戸教会フランシスコ会, 1973)
- ・『平戸学術調査報告』(京都大学平戸学術調査団, 1951)
- ・大橋幸泰『潜伏キリシタン：江戸時代の禁教政策と民衆』(講談社選書メチエ574) (講談社, 2014)
- ・宮崎賢太郎『カクレキリシタンの実像：日本人のキリスト教理解と受容』(吉川弘文館, 2014)
- ・宮崎賢太郎『カクレキリシタン：オラショ—魂の通奏低音』(長崎新聞新書004) (長崎新聞社, 2001)
- ・海老沢有道『幕末明治迫害期における切支丹社会の考察：五島青方天主堂御水帳の分析』  
 『維新変革期とキリスト教』(日本史学研究双書) (新生社, 1968)
- ・『御水帳(研究余滴—キリシタン史特輯—)』海老沢有道(基督教史学会会報)24, p.3-4, 1955.7
- ・『五島青方村天主堂御水帳』  
<http://library.rikkyo.ac.jp/archives/ebisawa/sub012.html> [accessed 2014.10.1]
- ・『長崎県のカクレキリシタン：長崎県カクレキリシタン習俗調査事業報告書』  
 (長崎県文化財調査報告書第153集) (長崎県教育委員会, 1999)
- ・『「海の星」馬渡島キリシタン小史』(海の星学園同窓会, 1991)
- ・田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』([3版]) (図書刊行会, 1978)
- ・片岡弥吉『かくれキリシタン：歴史と民俗』(NHKブックス56) (日本放送出版協会, 1967)
- ・古野清人『隠れキリシタン』(日本歴史新書) (至文堂, 1966)
- ・バリエ外国宣教会日本管区長「オリビエ・シユガレ師記念講演集—堂崎天主堂100周年[2008年]記念講演要旨『下五島で活躍した宣教師』」  
<http://frsimoguchi.web.fc2.com/hama/senkyosi.html> [accessed 2014.10.1]
- ・『カトリック愛苦会修道会の歴史的研究I：草創期』  
 中川憲次(福岡女学院大学紀要。人間関係学部編)9, p.47-53, 2008.3
- ・上智大学, 独逸ヘンデル書肆共編『カトリック大辞典, 第1巻～第5巻』(富山房, 1940-60)
- ・『ラゲ神父の面影』(著者、出版地、出版者不明)
- ・伊東誠二監修『福岡教区50年の歩み』(カトリック福岡教区, 1978)
- ・中島政利『福音伝道者の苗床：長崎公教神学校史』(中島政利, 1977)
- ・奄美宣教100周年記念誌編集部編『カトリック奄美100年：奄美福音宣教100周年記念誌』(奄美宣教100周年実行委員会, 1992)
- ・上神崎小教区100年誌委員会編『上神崎一〇〇周年記念誌：1880-1980』(上神崎カトリック教会, 1980)
- ・森一弘企画監修『日本の教会の宣教の光と影：キリシタン時代からの宣教の歴史を振り返る』(真生会館シリーズ) (サンパウロ, 2003)

(ISHIDA, Masahisa ; KATO, Fumi ; SEKIYA, Haruyo ; YAMADA, Naoko : 図書館事務課)



**南山大学図書館「カトリック文庫」**

「カトリック文庫」では、近代日本におけるキリスト教史の研究に資する資料群の構築を目的として、明治・大正・昭和初期のキリスト教関係出版物等を収集しています。これまで、購入はもとより、多くの皆さまからの貴重な資料の寄贈によって、コレクションを充実させてきました。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。

南山大学図書館カトリック文庫通信  
 カトリコス No.29 2014.11.1発行  
<http://office.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/>  
 発行：南山大学図書館カトリック文庫委員会  
 編集委員：石田昌久、加藤富美、関谷治代、山田直子  
 〒466-8673名古屋市昭和区山里町18  
 Phone:052(832)3707/Fax:052(833)6986  
 \*図書館Webページでもご覧いただけます。